

## 【教材の連続性と「見方・考え方」】 第54回

小学校中学年でのリレーという教材 (material ; der Stoff) の本質は、〈ものを誰かから受け取って、何かをして、誰かに渡すこと〉(☆) で、だからバトンの受け渡しが大事になり、ここが一番「楽しい」ところ(＝授業目標)になる。「位置に着く on your mark」「トラックを一周する」「全力でカーブを曲がる」「競い合う」などは、このシンプルな本質を豊かにする規定である。また、バトンを大玉に換えれば「大玉送り」になる。

教材の連続性の観点から見ると、この〈まえ〉の保育園段階では、〈ものを持って走る〉を本質に、トラックに沿って走らずワープする、次の人に渡さないうで逃げるなど、この段階ならではの楽しいあそびが成立する。さらに〈まえ〉では、ボールのやりとりになる。一方、この〈あと〉の発展した段階では、リオオリンピックでのリレー銀メダルのように、速度を落とさずにバトンを渡す高度な技術が要求される。さらに〈あと〉で、世代と

世代で資源の受け渡しとなると持続可能社会、文化の受け渡しとなると人類社会になる。

☆の目で『希望をつむぐ教育』の実践群を眺めると(教科横断的視点)、絵本『きりかぶ』のリレー読みは、セリフのリレーで、脚本を通して〈劇〉の本質に

発展する(小1・山岡貴英実践、92頁)。また、句のリレーは、連歌になる(中2・石川久美子実践、202頁)。

中教審答申(第197号)では、教育内容すなわち「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)を、「何ができるようにするか」(資質・能力)で再編成しようとした(コンピテンシーベース)が、学習指導要領本文ではこの結節点になる「見方・考え方」がうまく位置づいていない。(研究部・加藤聡一)



参考 「加藤聡一研究室 / eye(ページ)」

<http://kodomo.kitanagoya.org/eye/>

※これまでの「生活教育 eye」「生活教育キーワード」を掲載。